

『知って 考えて 実践する 国際看護』 グローバルに思考すること と多様性の受容の重要性を 改めて知る

著：近藤麻理／定価：1,890 円(本体 1,800 円 + 税 5%)
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



本書を手に取り読み終えるまでの間、私はなんとも胸躍る、そしてうずうずするような時間を過ごしていた。国際看護に経験あるいは興味をおもちの方であれば、おそらく同様の感覚を抱かれることだろう。また、本書はこれから国際看護を学ぶ学生にとっても、十分に好奇心をかきたて、そして考えさせる内容であると思う。殊に第3章では、国際看護の学び方や国際協力関連の仕事についても紹介されており、国際看護に携わっていきたいと思われる方はぜひ参考にされるとよい。

「今までの日本の看護教育はあまりにも国際的なことに目を向けてこなかった」という著者の指摘には私もまったく同感である。グローバルに思考することと多様性の受容は、看護においても重要である。著者がICNの倫理綱領を示して強調する通り、看護の対象は「人間」であり、国籍も人種も宗教も条件とはならない。このことこそが「なぜ国際看護？」の問いに対する根源的な答えである(そもそも医療や看護に「国際」と冠すること自体、日本的な発想なのかもしれないと思う)。また、国際看護イコール「海外で看護をすること」でもない。今や日本の人口の約60人に1人が外国人であり、外国人の患者に対応した経験のある看護師も少なくないだろう。そこには、言葉や異文化などさまざまな問題があり、対処をしていくための考え方を看護基礎教育に取り入れていくこ

とは喫緊の課題といえる。

さて、実はこれを書いている最中に東日本大震災が起こった。日本国民のみならず世界中の人々がこの大災害の惨状に胸を痛め、さまざまな支援活動を繰り広げている。現地には発災直後より国内のみならず諸外国の緊急援助隊や医療チームが入り、私たち自身も国際医療・看護の対象として援助される側になりうるのだと、私は今さらながら気がついた。

また、著者は本書の第2章で、被災者への支援のあり方や被災者でもある現地の看護職者のディレンマについて述べているが、今まさに現場で奮闘されている方々の辛苦を想像すると、我々全国の看護職たちがもっとダイナミックに動く手立てを考えていかなければいけないと思う。

今回の震災における医療支援も復興もまだ道半ばではあるが、これから地球上のどこかで起こる災害や紛争、あるいは感染症の流行に関心を持ち、「次は私たちの番」と、時に国境を軽々と越えて行動する看護師が増えていくことを期待したい。そして、国や人種の別なく人々の命と健康を守ること、それが看護の使命であり可能性でもあるということを、学生たちと語り合っていきたいと本書を読みながら強く思った。